

水泳継続意思と有能感の関係

The relationship between the continuous intention of swimming and the perceived competence

1K09A033

主査 宝田 雄大 先生

今中 美紀子

副査 奥野 景介先生

【目的】

現在では多くの子が水泳を習うスイミングクラブであるが、スイミングクラブが泳ぎを教える／習う所という固定概念ができてしまっているため、ある特定の泳ぎを習得後や、4 泳法を 25m 程度泳げるようになると、それでやめてしまう人がいるといった現状から、その後の水泳継続につながっていないという議論は近年盛んにおこなわれている。しかし、本来なら泳ぎの習得だけで終わるのではなく、覚えた泳ぎを使って楽しんでもらうことが大切で、その段階までもっていくことが指導者の大きな仕事であるとされつつも、どうしたら子どもが泳法習得後も自発的に水泳を続けたいという意思を示すのかは明らかにされていない。

そこで、本研究では泳法学習過程を終了した後も水泳を続けたいという意思を水泳継続意思と定義し、この水泳継続意思と子どもが自発的に運動する上で重要とされる「運動有能感」(岡澤, 1996) の関連性について明らかにすることを目的とした。

【方法】

東京都の A スイミングクラブの泳能力別にグループ編成されたグループにおける最上級生(男 22 人, 女 30 人, 3 年生:18 人, 4 年生:20 人, 5 年生:12 人, 6 年生:2 人)の 52 名に対してアンケート調査を行った。なお、この 52 名の泳力は同程度である。

質問事項は、岡澤ら (1996) によって作成された「運動有能感測定尺度」を参考にし、水泳に対する有能感について特化した内容に設定し、4 件法で回答させた。水泳継続意思についても、1 級(最上級)合格後もスイミングクラブや学校の部活動などで水泳を続ける意思の有無を回答させた。

分析は、統計解析ソフト SPSS を用いてカイ 2 乗検定, t 検定を行った。水泳継続意思のあるものを意思ありグループ、水泳継続意思のないものを意思なしグループとして、グループ間で有能感の下位因子である「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の各因子内の回答を得点化し、平均値(点)を比較した。

【結果】

グループ間で有意差 ($P < 0.05$) が検出されたのは「身体的有能さの認知」のみで「統制感」、「受容感」については差は認められなかった。

「身体的有能さの認知」の質問項目の中でも「水泳について自信を持っているほうです」という質問に対してのみグループ間で有意差が認められた ($P < 0.05$)。

【考察】

「身体的有能さの認知」が高い児童ほど、授業に対して高い評価を示すことが明らかにされている(北ら, 1995)といったことから、本研究で、唯一 2 グループ間で「身体的有能さの認知」のみが検出されたことはこういった水泳の授業に対する評価の違いが水泳継続意思に影響を及ぼしたのではないかと推測した。

「統制感」で有意差が認められなかった要因については、全体の平均が 3.66 点と高く、スイミングクラブのカリキュラムを経ていく中で全員が何らかの困難を乗り越える経験をして「練習すれば」「努力すれば」自分にはできるという認識を持つようになったため継続意思とは関連性が検出されなかったものと考えられる。

今回「受容感」と水泳継続意思の関連性は検出されなかったが、「水泳について自信を持っているほうです」という項目と「泳いでいる時、先生が励ましたり応援してくれます」、「一緒に泳ぐ友達がいます」という項目に関連性が認められたことを見ると、結局子どもに自信を持たせるためには周りの先生や友達からの影響が大きいことが示唆される。

なお、今回の調査では対象とした子どもの泳能力は同程度であったが、水泳を始めた年齢、最上級になるまでにかかった年数などが人によって違うため、それらの要因が今回の水泳継続意思に影響を与えている可能性があるという点は考慮しなければならない。

【結論】

本研究では水泳継続意思と有能感を構成する 3 つの因子についての関係について検討した。その結果、有能感 3 因子のうち水泳継続意思の有無との間で差が確認されたのは「身体的有能さの認知」のみであった。

